



平安時代の文学に見え近江国

II 湖東・湖南

寛仁4年(1020)上総の介の壬をおえて都へ上る父とともに東海道を旅した孝標女が記しとどめた「更級日記」に

ここの国々を過ぎぬるに駿河の清見が関と相坂の関とばかりはなかりけり

『口訳』 多クノ国々ヲ通りスギタナカデ、駿河ノ国ノ清見ガ関ト近江ノ国ノ逢坂ノ関カラ見タ景色ホド美シク印象ニトドマッテイルモノハアリマセンデシタ。

とあるように今も昔も、近江の風景はすばらしかったのでありましょう。前回に引きつづいて平安時代の文学作品に描き出されてくるふるさと近江のあとをたどってみましょう。

矢橋

今昔物語巻17第26の説話は甲賀郡の一人の下人が妻の織った布を海人がたくさん住んでいて、湖魚を商っている矢橋にもって行って売ろうとします。そこでその布と殺されかかっていた亀と交換し亀を助けてやります。その功德でいったん死んだのがいきかえるという説話ですが、平安時代にもここ矢橋は非常に栄えていたことが伺われます。外にも、矢馳やはちの郡司が後に延暦寺の座主となった教円を招いて堂供養をした話〔今昔物語巻第28第7〕がこのこされています。

永久4年(1116)百首 船

• にほてるややばせの渡りする舟をいくたび
見つるせたの橋守 源兼昌

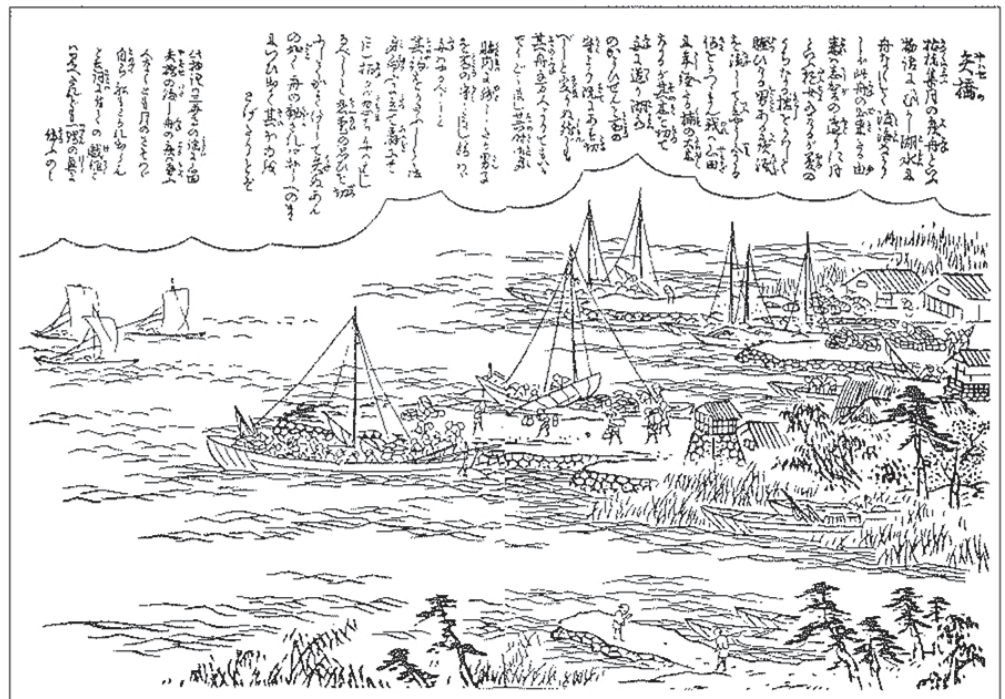
(現草津市矢橋町)

野路の玉川

歌枕として有名な六つの玉川がありこれを六玉川と呼んでいます。井手の玉川(京都)野田の玉川(宮城)高野の玉川(和歌山)調布の玉川(東京)玉川の里(大阪)とこの野路の玉川がそれです。またここは平安時代には宿駅として栄えてもいました。治承4年(1180)頼朝追討の平惟盛らもこの宿に泊まりました。この玉川は一名萩の玉川ともいい、千載集には

• あすもこむ野路の玉川萩こえて色なる浪に
月宿りけり

の一首がこのこされています。「枕草子」の中に「駅は梨原」とあるのもこのあたりです。(現草津市野路町)



金勝寺

天平5年、聖武天皇の勅願により、良弁僧正が開基した寺で紫香楽宮の鬼門を守る大伽藍であったようです。

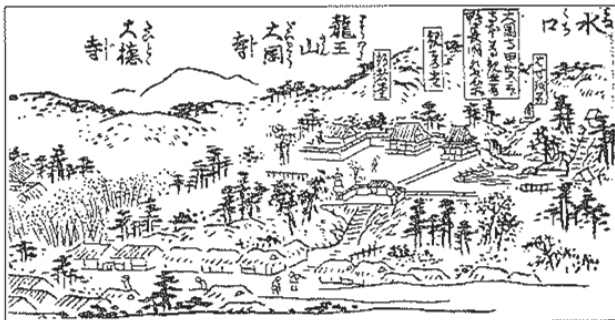
今昔物語巻第17第40には、この寺の僧光空が普賢菩薩に助けられた話がのっています。嵯峨天皇、仁明天皇、村上天皇など、歴代天皇の崇敬も厚かったようです。

(現栗東町荒張)

岩根山

甲賀郡甲西町と蒲生郡竜王町の境にある細長い山で、高さは405mあります。岩根という名が、永久不変に通じるためか、天皇が即位された時行なわれる大嘗会の悠紀方の風俗歌にはしばしば歌われる地名です。

- 久しさのしるしなるべし色かへぬ岩根の山の松の緑は(白河天皇永宝大嘗会) 実政
- 咲きいづる岩根が嶺の藤かづら春はすぐれど来る人もなし(堀河天皇大嘗会) 匡房
- 行く末を思ふもひさし君が代は岩根の山の峰の若松(六条天皇仁安大嘗会) 俊成



大蔵山

安和元年(968)大嘗会風俗

- みつぎつむおほくら山はときはにていろもかはらずよろづ世ぞ経む(拾遺集) 能宣
後冷泉院大嘗会御屏風
- うごきなきおほくら山をたてたればをさまれる代ぞひさしかるべき(後拾遺集) 資業
仁安元年大嘗会屏風歌
大蔵山 山脚民家多積稲之所
- かずしらず秋の刈穂をつみてこそ大蔵山の名にはおひけれ
この山の名の大蔵が豊かな稔りをこい願っ



た古代人の心をとらえずにはおかなかったのでしょうか。数多くの大嘗会風俗の歌がのこされています。地名辞典を調べますと「甲賀郡水口町大字水口の東北方の山。古くは大岡山、大蔵山、岡山ともいった。標高282m、石英斑岩からなる孤丘で、山頂から甲賀郡下を一望におさめ……」とあります。

蔵部山

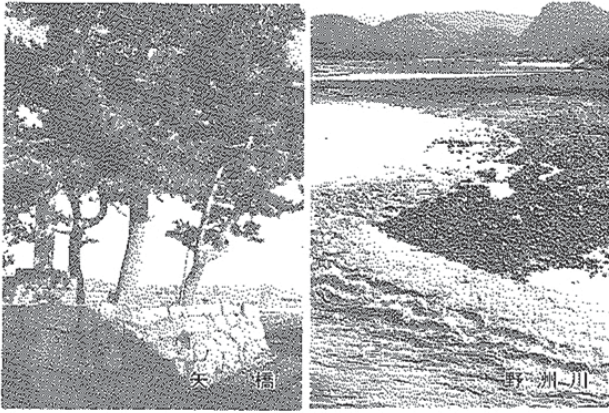
- 梅花にほふはるべはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞありける(古今集) 貫之
これさだのみこの家の歌合の歌
- わが来つる方もしられずくらぶ山木々のこの葉のちるとまがふに(古今集) 敏行
- 秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見えわたりける(後撰集) 貫之
- かみな月しぐるままにくらぶ山したてるばかりもみぢしにけり 源師賢
岩波古典文学大系には「くらぶ山 所在不明」と記されていますが夫木集には山城或伊賀又近江とあって伊賀と近江の境の甲賀郡甲賀町蔵部山を指すこともあるとしています。今油日越と称しているこの峠は光孝天皇の仁和2年(886)鈴鹿峠が官道になるまでは、東国への官道として重要な意味をもっていたのです。

吉身

仁安元年悠紀方御屏風

- きみが代は吉身の村の民もみな春をまつとやいそぎたつらむ 俊成
野洲川の伏流水が湧き出るところで、持統天皇7年ここにあった益須寺の醴泉を飲むための行幸があったともいいます。(日本書紀)

六条天皇の大嘗会に野洲郡が卜定され、この歌が詠進されました。なお現在守山市役所もここに存在しています。



野洲川

三重県との境をなす御在所山(1209m)から流れ出てその主流は61km流域面積は 387km²もある県下最大の河川です。

長和元年大嘗会悠紀方

- すべらぎの御代をまちでて水澄める野洲の川波のどけかるらし(栄華物語) 輔親
この川の沖積平野である野洲平野は県下ではもっとも豊饒な地で平安時代から悠紀齊田がしばしば卜定されたことはそれを根拠づけているのではないのでしょうか。

三上神社

日本霊異記下巻第24は「近江国野洲の郡の部に御上の嶺に神社あり」と記し出されています。東天竺国の大王が猿の身となつてこの社の神となつていたのですが、猿の身を脱れる為に法華経を読んでくれと頼む説話です。やや荒唐な話ですね。

安和元年大嘗会風俗

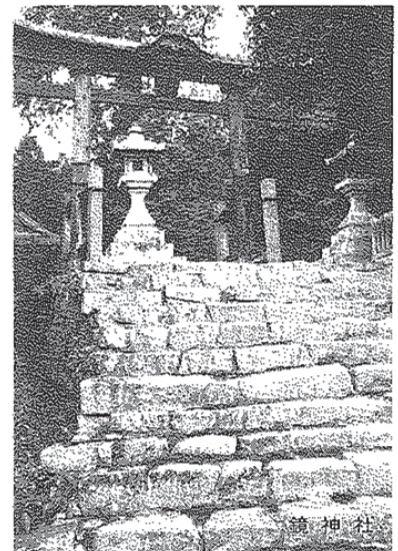


- ちはやぶるみ神の山のさか木ばはさかえぞまさるすゑの世までに(拾遺集) 元輔
天禄元年大嘗会風俗
- いのりくるみかみの山のかひしあればちとせの影にかくてつかへん(拾遺集) 能直
現在は国道8号線で神社と山は分離されていますが古くは神体山として天之御影の命をまつり、安国造、三上祝がその子孫であるとされています。

篠原

弥生時代からひらけていた地で、明治14年小篠原大岩山で14個、昭和37年東海道新幹線工事の土砂を取っている時10個の銅鐸が発見されました。古墳時代に入って、円山古墳甲山古墳(国史跡)をはじめとする古墳が多数存在しています。今昔物語巻第28第44の説話はこうした古墳を舞台に展開されています。墓

穴へ雨宿をしていたところへ後から同じようにやってきた男が先の男を鬼か神と間違え、絹や布を捨てて逃げてしまったのを先の男が自分のものとした話です。(現 野洲町小篠原・大篠原)



鏡山

蒲生郡竜王町と野洲郡野洲町の境界にある384mの竜王山と南の207mの星ヶ峰の総称です。

- 鏡山いざたちよりて見てゆかん年へぬる身はおいやしぬると 黒主
- あふみのやかがみの山をたてたればかねてぞみゆるきみがちとせは 黒主
久寿二年大嘗会屏風
- くもりなきかがみの山の月を見てあきらけき世を空にしるかな 永範

この山の名は壬申の乱の時吉野軍の将、鏡大君がこの山で討死したので名づけられたといわれます。また鞍馬寺の稚児であった16才の遮那王が承安4年金壳吉次に伴われて奥州へ下る途中、鏡宿で自ら髪をあげ義経と名乗ることとなった跡も、この山の北麓に存在しています。

水茎の岡

古今集巻第20 大歌所御歌に

みづくきぶり

・水ぐきのをかのやかたにいもとあれとねて
のあさけのしものふりはも 読人しらず
という一首があります。水茎岡は今でこそ島
とは思えませんが、かつては湖に浮かぶ一小
島でした。標高

187mの主峰と
その西に室町時
代末期に足利義
澄を守って戦っ
た九里氏の城跡
のある小丘とで
成っています。

ここに立って平
安時代の巨匠、
巨勢金岡はあま
りの絶景に筆を
抛ったとも申します。



水茎の岡

松が崎

近江八幡市、西国三十一番長命寺の西麓の
湖岸の名です。昔はきっと、青々とした松が
立派な林を作っていたのですが、今は湖
岸道路が走り、松の風情も大したものはありません。

天禄元年大嘗会風俗

・つるのすむ松が崎にはならべたる千世のた
めしを見するなりけり(拾遺集)

安和元年大嘗会風俗

・ちとせふる松が崎にはむれみつつたづさへ
あそぶ心あるらし(拾遺集) 清原元輔
こうした歌のよまれた時代は、さぞ美しい風

景が展開され、南方に水茎の岡、西方に比良
の連峰が四季の美しさをたすけていたであり
ましょう。

安義橋

近江八幡市倉橋部町と蒲生郡竜王町大字信
濃とを結ぶ長さ 100m巾5mの橋で日野川に
かかっています。この橋について今昔物語巻
第27第13話に「近江国安義橋なる鬼人をくら
ふ語」という説話が収録されています。近江
の国府の館で若い男たちが物を食い酒を飲ん
でいるうちに鬼が出て今は通る人もないとい
う話題が提供されました。すると一人が、こ
のお館第一の名馬の鹿毛さえ、頂けたら安義
の橋を渡ってみせようと宣言し、女に化けた
鬼をうまくかわして戻ってきたものの最後は
命を失ってしまうという話です。聖なる水を
人工的に遮断することの禁忌を言いあらわす
お話でもありましょう。

平安時代の文学作品のうち紀行文や日記の
たぐいは、実際に現場へ行ってその風物を描
写してはいるのですが、物語・説話・和
歌などは、どうもそうした臨場感の稀薄なも
のが多いようです。特に大嘗会の歌はめでた
く歌いあげようとする方に力をそそいでいる
ので臨場感の薄さが強く感じられます。律令
制度が崩壊して中世の武士階級が政権を握っ
てしまう直前の時代に都に対して、その経済
的な支えをしていた近江国の重要性が大嘗会
の歌の中から感じとれるようです。それを
結びとしてこの稿を終ります。

(提供 山村金三郎氏 写真 松本蒼平氏)

松が崎

